



(株)山嘉

【問屋町店】岐阜県岐阜市問屋町2-16-3
TEL.058-266-0200 FAX.058-265-1888
【本 社】岐阜県岐阜市花月町2-20-1
TEL.058-246-6566
<http://www.chirimen-yamaka.co.jp/>

丹後ちりめんに現代感覚をプラスして 個性と高級感あるファッションを提案

対談 代表取締役

田口ニ吉

インタビュー「野球評論家

西本聖

西本 本日は(株)山嘉さんの問屋町店を訪ねて田口社長に話を伺ってまいります。店内を見学して丹後ちりめんの趣きあるファッションに懐かしさと新鮮な感覚を抱いていますが、まずは社長のこれまでの歩みを交えて会社の沿革をお聞かせ下さい。

田口 私は中学を卒業して十二年ほど高いの修業をした後の昭和三十九年、二十六歳で独立を果たし、問屋街にて子供服を扱う店舗を開店しました。お客様に恵まれ経営は軌道に乗っていたのですが、新しい商店街ができる際に出店のお誘いを頂き、同時

に少子化を考えて婦人服への転換を助言して下さいましてね。婦人服業界に参入したのが昭和五十三年のことでした。

西本 将来的なことを考えての転換だったと。すぐに軌道に乗られたのですか。

田口 いえ、かなり苦労しました(笑)。市場調査などは行なわず自分で作りたいもの、個人的なものを提供しようとの思いが強過ぎたのでしょう。生地は当時一メートル八〇〇円程度が平均だったのに対し、私は一、八〇〇〜二、〇〇〇円クラスのものを使用していたため当然ながら商品価格が跳ね

上がり、なかなか受け入れて頂けませんでした。また、時代的に何でも売れる世の中で特にブームのファッションが支持される一方、個性的なファッションに対する需要は低いという傾向が強かったのですね。

西本 おっしゃるように、当時は街を歩けば誰もが似たようなファッションに身をまとっていたのが当たり前でしたものね。で、手応えを感じられるようになったのはいつ頃からですか。

田口 家内の親戚が京都で生地屋さんを営んでいまして、その方が作っている丹後ち

りめんを扱いはじめた頃ですね。それが昭和五十五年頃です。そして少しずつ良い生地が作られるようになったため、平成元年に丹後ちりめんを専業にすることを決断したわけですが、それにもきっかけがあります。陶芸家で人間国宝級の友人が私の作った商品を見て「僕と同じように一つの商品にしたらどうか」とアドバイスしてくれたことが私の背中を押したわけですが、時代的にもバブルが弾けて個性的な商品が日の目を見るようになった時期で、まさにターニングポイントになりました。現在も世界的に不景気が深刻化していますが、お陰様で私どもは順調に売り上げを伸ばしており、これも海外や機械では生産できない職人さんの手によるオリジナリティーの技と、本物志向や個性を尊重する時代のニーズがマッチしてきたからだと自負しています。

西本 ファッションも大量販売・大量消費の時代が終わり、今では少々高くてもあまり売られていないような、いわゆる自分だけのお気に入りを求めるこだわり派が増えているということですね。

田口 そうですね。一般的に小売店は売りやすい低価格商品を多く扱いますが、私どもではデパートなら四〜五万円程度で販売している高額商品も扱っているため、丹後ちりめんを紹介した本を読んで頂くなど、小売店さんと一緒に勉強しながらその良さを広めることに努めています。

最高級のオリジナル服地を実現

西本 では、丹後ちりめんの良さや御社の商品の特徴を具体的にご紹介頂きたいのですが、聞くところによるとオリジナルブランドもあるそうですね。

田口 はい。『風は旅人』『祭りばやし』というブランドを展開しています。まず丹後ち

りめんの特徴についてご紹介しますと、日本三景の一つに挙げられる「天の橋立」を有する京都府北部の丹後地方で享保の昔から受け継がれてきたもので、その最大の特徴は生地全体に細かい「シボ」があることです。総合産地化を目指す丹後が伝統の撚糸と織技術を駆使し、感性豊かなちりめん洋装生地を生産し、加工はすべて丹後ちりめん組合岩滝工場で行なわれ、独創の練技術と風合い処理を施して仕上げられるのですが、それによって丹後ならではの「シボ」形成とドレープを深めたソフトな地風を実現し、エレガンスで格調高いシルエットを演出しています。私どもでは長い歴史を持つ丹後地方の伝統と技術の上に今風の感覚を加味するべく、糸から吟味して練り上げた最高級のオリジナル服地を作って商品に仕立てています。

西本 同じ丹後ちりめんでも生地からこだわっておられるのですね。





長い歴史を誇る丹後ちりめんに現代感覚を加味するべく、糸から吟味して練り上げた最高級のオリジナル服地と、小ロット・多品種のポリシーで个性的かつ高級感あるファッションを提案する(株)山嘉。この不況期にも売り上げを着実に伸ばし続ける背景には、田口三吉代表取締役の揺るぎない思い・人生観がある。他社には絶対できない仕事をするという矜持と厳しさ、お客様に喜んで頂くことを最優先に考える誠実さ、仕事や人生を楽しむことで広がる人との縁——それらで紡ぎ出される逸品の数々は注目に値する。

INTERVIEW SANKICHI TAGUCHI × TAKASHI NISHIMOTO

田口 はい。京都ではもともと丹後で生地を作り、染など一連の加工は京都市内で行なわれていたため、生地下は作れるものの生地が作れず、どんな柄を染めていいかも分からない状態でした。そんな中、私もではお客様に合うものを提供すると同時に自社カラーも出したいと専門的な本を読みあさって研究を重ね、オリジナルな柄を染めることに尽力しました。幸いにも試作したものをアドバイスを下さったり、微妙な色具合を染屋さんに指図できる色出しの達人に恵まれているため、高品質のオリジナル生地を作ることが可能です。換言すればその方を抜きに満足していく仕事ができないのは明白でして、本当に心強く有り難い限りです。

西本 販路についても教えて下さい。

田口 店舗販売の他、全国の小売店及びデパートさんに卸しています。滋賀県や北陸地方を中心に展開されている平和堂さんでは定期的に催事を行なって、チラシやダイレクトメールでご案内させて頂いています。このような商品は近隣で買求めることができないと毎回好評を頂いています。

西本 それにしても、ブラウスやジャケットなど多様な商品がラインナップされていることにも驚きます。

田口 その他にもベストやパンツ、スカート、Tシャツ、ブラウス、コートなどを商品化していますが、大手さんではできない多品種・小ロットにもこだわっています。お召しになる方も自分だけのファッションという点に魅力を感じているはずですので、同じ商品はたとえ色違いであっても大量には作らず、卸しも一つの町に一軒の小売店さんというように、なるべく商品が重ならないよう配慮しています。ただし着用される方が近隣の町に出掛ける場合もありますの

で、その時は「バッティングしなければいいのに」と懸念しています(笑)。

誠実な仕事で感動をお届けする

西本 では、田口社長が大切にされているモットーをお聞かせ下さい。

田口 ひと言に集約すると「誠実」ですね。これまで儲けようと考えたことはなく、まずは何かしてお客様の信頼に応えられる仕事をしよう、お客様に満足してもらえらる商品を作ろう——その気持ちだけで頑張つてまいりましたし、どんな仕事でも手を抜かず、自分の仕事は他人には絶対できないという確信と誇りを持ちながら、きっちり遂行することを念頭に置いて仕事に臨んできました。「利益はお客様に喜んで頂くことに対する神様からの「褒美」ということが分かったのは、いろんな経験を積んで五十歳を過ぎた頃でした。例えば小売店さんから電話やファックスでご注文を頂くケースが増えています。良い品が入っていたので嬉しい。ありがと」というお言葉を頂戴するとこちらも報われますし、これからの荷を開けられた時に感動を与えられるよう頑張ろうと励みになります。

西本 研究心も厳しさの一環ですね。

田口 人間はともすれば楽な方向に目を向けるのですが、要はどれだけ自分に厳しくできるかが鍵であり、心の持ち方次第で運不運も決まるような気がします。「自分は運がいい」と思うことで運気は上がりますし、豊かな人間性もつくられていくのではないのでしょうか。それとこれはモットーではありませんが、人生の節目節目で良い人に出会ったことにも感謝しています。仕事は一人でできない、多くの人に支えられ、教えられてできるもの——これこそが自らの人生を振り返っての率直な実感ですね。

西本 それも人を惹きつける社長のお人柄の賜物ですよ。

田口 そう言ってもらえて恐縮です(笑)。これは余談になりますが、人生は遊び——特に人と交わって楽しむ遊びが不可欠というのが私の持論でして、遊びの中から経営や人とのかわり方など多くを学べます。私は音楽や落語が好きで、例えば東京から嘶家さんを招いて落語会を開いたり、自宅でコンサートを開いて楽しませてもらうているのですが、そんな時には今一番の趣味とも言える料理でもおてなしをしており、多い日には五十人前分の料理を作ることもあるほどです(笑)。

西本 仕事も人生も真剣に楽しんでおられるのがよく伝わってきます。

田口 私は現在七十一歳ですが、年齢を重ねるのが楽しみになるくらい人生を謳歌させてもらっています。従業員にも「楽しんで仕事をしよう」と強調しており、そのためノルマなどは一切ありません。

西本 豊かな人間性が艶の良いお顔にも表れていますよ(笑)。

田口 そうでしょう(笑)。私は未だに仕事で十二時間立ちっぱなしの時もあります。登山やテニスで鍛えていることもあって疲れたと思っただけがないのですよ。

西本 では、最後にこれからの抱負や夢を伺いたいのですが、既に後継者はいらっしやるのですか。

田口 息子が大学を卒業して他所で三年間修業をさせて頂いた後、家業に就いて十三年になります。ホームページを立ち上げたり三十六歳の今は洋裁学校に通うなど仕事に対して前向きです。精神的にまだまだ未熟

① INFORMATION

しなやかで優しい手触りの丹後ちりめん。自社ブランド『風は旅人』『祭りばやし』をどうぞ



ではありますが、従業員と共に企画製作をするなど、もの作りのセンスに関しては私を超えているかも知れません。

西本 将来も安泰ということ、ますます楽しみが増えそうですね。

田口 規模を大きくする気はなく、あくまで良い商品を作り続けて一人でも多くの方に「この生地はしなも寄らず、洗濯しても弾力性が失われない。ちりめんファッションでおしゃれを、人生を楽しもう」と思って頂くことが目標です。個人的にはまだまだやりたいことが山のようにありますので、最低でも八十歳までは現場から離れず、それ以降も生涯現役で頑張りたいですね(笑)。

西本 本日は対談を通してエネルギーを頂きましたよ(笑)。お仕事も私生活も末永く楽しんで下さい。ありがとございました。